

学位論文作成に臨んで

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2017-10-03 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 向井, 互 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/2297/2895

学位論文作成に臨んで

向井 互(国際社会環境学専攻3年)

学位論文(以下「博士論文」)執筆に臨む学生として、博士論文に対する認識を示す。博士論文が、自身の研究成果の集大成である要素と、今後の研究姿勢を明示する要素から構成されるとすれば、自身に求められる要素は後者であると考え。

博士論文で求められる研究姿勢とは、大きく3つの項目が想定できる。一つには、注目を浴びることのなかった研究対象・地域への着目と開拓。二つには、斬新な分析手法の開発と利用。最後に、前者2項目に基づく新領域研究の開拓である。

一方、博士論文では、執筆者の研究の位置付けについても問われる。これは、狭い分野研究(例:地域編年研究)における位置付けを意味するのではなく、研究対象の地域史や同時代における他分野研究の成果との関連性を明示することが求められることを意味する。すなわち、博士論文を通じて提示する成果や新たな見解は、狭い分野内でのみ通用するものでは不十分と考える。

執筆者は「研究史」の章において、自身の研究の位置付けを開示する。そこでは、研究の強い動機、

そして関連分野を視野に入れた研究成果の有効性・新規性が提示される。

論の展開の基礎となる資料の収集について、考古学ではその研究対象の特徴により求められる方法が異なるであろう。研究対象の中心が遺跡や遺構となる場合、分析資料の多くは、すでに調査により破壊されており、報告書に掲載される二次資料をして研究を進める比重が多くなる。したがって、執筆者自身の新たな分析方法をもって遺跡・遺構の研究を行う際には、執筆者自身が発掘調査を実施する必要がある。一方で、遺物が研究対象の中心となる場合、過去の調査成果を直接再調査できる場合もある。

このように、多様な資料収集方法が見られる中、博士論文の中核となる資料群については、執筆者自身の(発掘)調査により収集する必要があると考える。もちろん、ここには再調査も含まれる。

また、自身で行った発掘調査報告が博士論文の主体となることは、博士論文を通じ執筆者の研究者としての基礎能力を審査される前提に立てば、十分にありうるケースである。調査報告の中で、執筆者の目的と動機を明確にし、調査結果の提示、そして得られた成果に基づく討論と結論に至る。そこで肝要であるのは執筆者が示す新たな知見に至る論の展開であり、決して論文・調査報告という体裁の問題ではないと考える。

以上、自身の認識を述べた。将来、諸先生方の厳しい批判を前にして、この程度の認識では論文執筆に臨む姿勢としては脆弱極まりないことを痛感することは確実である。否、自身で標榜した上記の水準への到達は、未だ論文執筆の入口にも到達していないとも思う。しかし、この水準を通らねば論文執筆の入口にたどり着かないことも確かであると考えている。